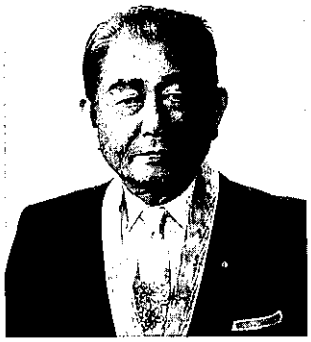
会員の広場
Member's Open Space



古川柳の面白味を

●美唄歯科医師会会員
雨田　実

前号に古川柳は七色唐辛子と同じように，いろいろの持ち味があって面白いと書いたが，今回は古川柳のどちらかといえば上品とはいい難い句ではあるけれども，気品にかけるような句ほど，それをカバーするかのごとく高度の知性を，程良く働かせているという。これを「逃げ」といい，古川柳に欠くことのできないものであるそうだ。この原稿が活字になる頃が田植のころでよいタイミングと思う。

田植とは農業機械ですることが殆どの現代では，ひと時代まえの本州のアカネたすきにスゲの笠の田植風景を彷彿させて頂きたい。

早乙女も　水がにごらざ　おかしかろ

宝暦七年の句で古川柳の中でも古格あるものとされている。赤い短い湯文字の田植女が，明鏡止水の田の面に立てば股の間に珍景が？というような想像は，けっして上品とはいわれないのにそれを句に出していうところに問題がある。

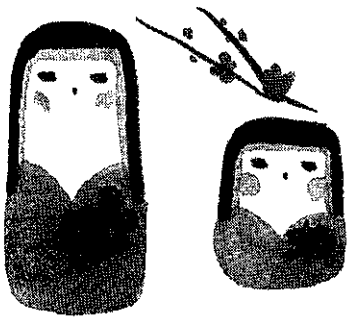
下り立つと形定まる田植かな　太祇

女性も田に下りるまでは，畦の泥で滑ったりして形も乱れることもあるが，田の面に下り立ってその位置につけば，清楚な早乙女の姿になるという意味の句であるが，炭太祇の発句であり，文学はこのように表現すべきものとしている。このような句もあるのに，古川柳はどうしてこういう慎みのない句を作るのか。奇抜なことをいって，人の目をひくためか？そればかりではない。この句には立派な「逃げ」がある。一応低俗な句と思わせておいて，作者はさらに一段高いところを狙い，その低俗さを解消しようとしている。

中国，楚の詩作集楚辞の漁父之弁に「滄浪の水清まば，以て吾が纓（纓とは冠を結ぶ紐のこと〈あご紐〉）を濯ふべく，滄浪の水濁らば，以て吾が足を濯ふべし。」とあるのを引用し，楚の屈原と早乙女とを結びつけた趣向である。屈原も早乙女も水が濁らなければ面白いのだとしている。屈原は楚の王族で大臣であったが，大国秦との抗争の中で方策が用いられず，追放のうき目に会い地方を放浪したあげくに，汨羅の淵に身を投げて死んだ戦国時代の憂国詩人で民衆に人望があって，その詩作を集めたものを楚辞といい前述の漁父之弁は名高い。これは屈原が流浪中，水辺の老漁夫から忠告を受けたことを記している。滄浪の水はいつも澄んではいない。濁っていれば足でも洗っておけばよいのだ。清濁に応じて世に処することが肝要だといった。しかし屈原はそれを却けた。そのように妥協することが，すでに濁っている。自分は濁っている世の中に住むことは出来ないといって，ついに淵に身を投じたというのである。後世の人がその志を憐れみ，滄浪ばかりでなく，河の水の濁らないことを屈原のために祈り命日の五月五日

には菖蒲を軒にさし，竹の筒に米を入れて川に流し水神に捧げた。それが端午の節句の粽（ちまき）の起源ともいわれ，屈原の霊を弔うような風習をも生じた。

この風習は日本にも伝わり，屈原の故事を知ると知らぬと，今日もこれをやっている。濁った水を見れば，屈原が可哀想だというような気持ちは日本ではとうに失われているが，楚辞を読み，さらにそれを引用した孟子を読んでいるような人たちは，皆その故事を知っていたのであろう。つまり学識人であった。そこで早乙女の句を見れば，それがすぐ屈原と結びついて，濁らざおかしかろ，にも賛意を表し，下品は下品なりに見どころありとしたのであろう。これが「逃げ」であって句意の転換であり，同時に一句の曲折をなし，内在律を形作るものであり，古川柳の奥の深さを物語ってくれる。

古川柳には風景描写の句もあるが，大部分は人間や社会を題材にした人事句である。人事句は三つに分けて，高番（こうばん）・中番（なかばん）・末番（すえばん）といっている。高番句は新聞でいえば，政治・経済欄のような四角張った記事内容のもの，中番句はその社会面に相当し，庶民生活の動きを伝えている。末番句はいわゆる艶種（つやだね）と称するゴシップ欄で，花柳界の消息や，人間社会の裏面を伝えている。恋句，世話事，下女抔の句にあたらしき手柄多しといわれ，末番句にも早乙女の句のように，古川柳らしい知性の閃（ひらめ）きを覚える佳句も多い。古川柳は自由に作られる詩歌ではあるが，言論の自由の認められなかった封建時代に政道の批判などを公表することは著しい制限が加わったため，筆禍事件は頻々と起こったという。

そういう状況のため古川柳の選者たちは特に意を用い危険な句は絶対に採らなかったといわれる。歴史句の多いのも，一種の安全策で史上の事実であるといえば申し開きが立つと考えられたからであろう。同じ意味で遊里の句も多く選ばれている。これも別世界の消息で，政道の批判などと凡そ関係のないことであるので選者が暗にこれを奨励したとも察せられる。これを裏返しにいえば，歴史句と遊里句は古川柳が羽を伸ばし得る天地であった。自由であるゆえこの二方面に多くの佳句が残されている。現代人が見ても歴史句は最も分かり易い。これに反して遊里の句は最もわかりにくいとされている。昔から悪所（あくしょ）といわれた所で，しかも現存していないのであり現代人には，すごぶる縁が遠い。歴史には教科書があって学校で教えるが，遊里の教科書などはなく，専門の大学でも遊里文学の講座までは設けていない。多くの人が遊里そのものに未知であろうから。句解も未知の世界を案内するような親切さが必要であろう。次回から簡単に遊里なるものを説明し，佳句をその間に入れて解説したい。